

〔月刊〕

キャッチ ピース

6

通巻85号

1993. 1

定価●100円

自衛隊の海外派兵を食い止め、大幅軍縮を！
米軍基地を撤去しよう！
反核運動を継続し、核廃絶を！
憲法9条を世界に！
市民による平和政策を提起しよう！
草の根の国際共同作業をすすめよう！

月刊トマ喰い虫改題



1月6日ソウルの日本大使館前で（韓国教会環境研究所提供）

プルトニウムとトマホークで明けた93年 構想ゆたかに、平和と軍縮にチャレンジしよう！

★維持会員（月間）	★参加会員（月間）	★通信会員	脱軍備ネットワーク キャッチピース
個人 1口 1000円	個人 1口 500円	年間 3000円	
団体 1口 2000円	団体 1口 1000円		

<会費は本紙購読料をふくみます>

あなたも会員・読者に！

連絡事務所●〒223 横浜市港北区箕輪町3-3-1
TEL 045(563)5101
FAX 045(563)9907
郵便振替●東京6-136148 口座名「キャッチピース」

まず 練習問題から はじめよう

平和・軍縮への新たなチャレンジ

遠藤洋一

福生市議・キャッチピース運営委員

1月19日「朝日新聞」(神奈川版)によれば、ペルシャ湾に展開し、イラクを爆撃した米軍艦隊の中に、トマホーク搭載艦ヒューイットが加わっている。トマホークがヒューイットから発射されたのはまず間違いない。トマホークの一部は迷走し、市民の命を奪った。在日米軍基地がまた戦争に使われた。

ニュースは、またアメリカ軍がイラクにトマホークを発射したと報じている。今年一九九三年はトマホークで始まった。私たちにあっては不幸な年の始めといわなければならぬいだらう。悪漢フセインを懲らしめるためなら何をしてもよい。新しい大統領のビル・クリントンもそう考えるのだろうか。少なくとも、今回イラクは、他国に対してはなにもしていない。いかなる国に対しても武力の攻撃を行ってはいない。日本にいる私たちは、どこからで

ヒューイットがトマホーク発射か？

横須賀母港

も飛んできてねらいを定める、トマホークの恐怖の下にいる人々のことは想像するしかない。しかし、そのトマホークは、日本の港から運ばれている。トマホークの配備を許すと運動を始めて十年。湾岸戦争でのトマホークの実戦使用が始まって二年。しかしながら、残念なことに私たちは、具体的にトマホークを止めるに至っていない。今年こそは、の思いがある。今年こそはトマホーク艦を止めたいの思いがある。

しかし、一方では、世界は確実に軍縮の方向に向かっている。日本の防衛予算にもわずかだが、その突出に陰りが見え始めている。平和運動はいま、軍縮の流れの中で正念場を迎えようとしている。

私たちは、軍国主義や軍拡主義に抗するだけでなく、軍縮の、脱軍備の市民のイデオロギーと、未来へのプランの提案が、どうしても必要になっている。平和を作り出すことに何が必要なのかを、何が不要なのかを明確にして行く必要がある。今年、私たちに必要なことは、市

民としての軍縮の提案、そして今まで、考えることを避けていた「安全保障」の考え方の提起。自衛隊の削減と米軍基地の縮小と返還。そして、平和転換のビジョンの提案だろう。

沖縄では、軍用地転換についての大きな議論が全島的に起き、県や自治体でのテーマになっている。また、自衛隊が削減されたら、町がなくなってしまうと心配する、北海道の自治体でも、「まちおこし」と自衛隊軍縮が地域のテーマになりうる。

そして、私たちにあってさしあたってどのサイズの「軍隊」と、どの金額の「防衛費」が考えられるか、きわめてむずかしい危険な議論もなくてはならない。

しかし、そこを避けては「市民の軍縮論」は成り立たない。戦後ずっと、しないで済ませていた、こう言った議論をし始める年が今年のような気がする。

まず練習問題から取り組もう。そうすればもっと上手な「市民の軍縮論」ができるにちがいない。◆◆

あかつきとともに帰ってきた 一トンのプルトニウム

山中悦子 編集部



写真・山中悦子
あかつき丸(白い船橋)の接岸を見守る。

お はようございます。さ・む・いです。当たり前です。一月五日の午前六時の海岸が寒くないわけがありません。それももう一時間も前からここにこうしているのですから。私は今、茨城県東海村の豊岡海岸に來ております。間もなくこの海岸から一キロほど南にあります東海港に全世界が注目して参りましたプルトニウム輸送船、あかつき丸が入ってこようとしています。日の出まであと五十分。海上輸送に反対してきた市民が大勢集まって先程からじつと水平線の彼方を見つめています。あかつき丸を待っています。

私 昨夜十時半に横浜を立ちました。守谷インターで待ち合わせをした神奈川からの車五台(総勢二十五名)は、高速道路を降りる際に一度だけ警察の検問を受けました。午前四時過ぎ無事に指定の海岸へ到着しました。ところでどうでもいいことですが、星が綺麗でした。降るほどの星の数に圧倒されてしまいました…。

車を降りてすぐに『プルトニウム』という茨城アビールを中心とした数十名の市民による集會に参加。そしてそこから約三十分、砂に足をとられながら暗い中をみんなぞろぞろ歩いてやってきました。ここはあかつき丸の入港がまじかに目撃出来る海岸です。東海発電所からの廃水が海に注いでいるところ。今の私は修行僧になった心境です。無私の境地で寒さに耐えています。その瞬間が来るのを今や遅しと待っています。

よ うやく人々のシルエツトがモノクロからカラーに変わってきました。読経、ギター、歌声、シュプレヒコールが波音を消し始めました。旗、横断幕、様々なデコレションが砂浜に広がっているのが見えます。空には凧も上がっています。いよいよです。東の空がほんのり茜色に染まって参りました。寒さは相変わらずです。ただいま六時四十分、今日の日の出は五十分です。もうそろそろ、水平線のかなたにあかつき丸が見えるはずで

(十一ページ)

原潜

新しい敵を見つけた？

＝寄港パターンに変化＝

梅林宏道

●寄港回数・横須賀で減、佐世保で増

昨年（一九九二年）の横須賀への米原子力潜水艦の寄港回数は年間二一回に留まり、一昨年の三五回に比べると激減した。しかし一方では、

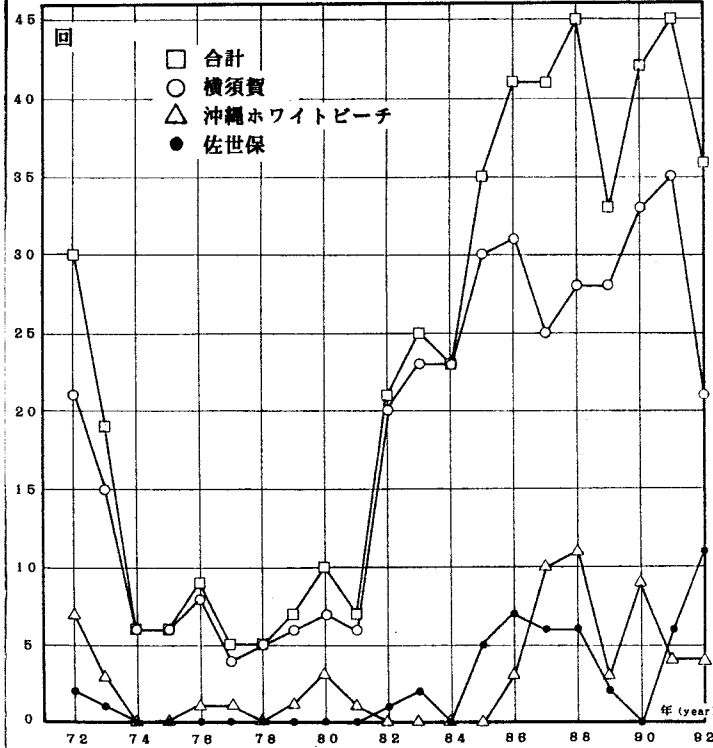
●短時間滞在が増える

佐世保への原潜寄港回数が年間一回と至上最高を記録。その結果、日本全体の寄港回数は三六回となり、一昨年の四五回と比べると少ないが、一九八九年の三三回よりも多い。この変化の状況はグラフに示した。もう一つ注目すべきことは、寄港した原潜の隻数である。昨年、日本の港に寄港した原潜は一二隻で、一昨年の一四隻、その前の年の一三隻と比較して大きな変化はない。つまり、昨年も近年と同じ数の原潜が日本近海で活動しており、横須賀への寄港は減ったが代わりに佐世保への寄港が増えた、と理解することができる。

寄港回数よりもむしろ寄港した原潜の滞在時間に大きな変化が現れていることに注目したい。変化は、一九九〇年から現れている。古くから沖縄では主流であった短時間寄港が横須賀・佐世保で急増しているのだから、その変化を分かりやすく図示する

原子力潜水艦寄港回数の推移

(Portcalls at Japanese Ports by the US Nuclear Powered Submarines)



ために、寄港原潜の滞在時間を六段階に分けて度数分布を示した。一九九〇年以降、一時間以下の短時間滞在が増えていることが分かる。図には一九八七年以降しか記されていないが、それ以前も状況は同じで、一時間以内の短時間寄港の回数は八二〜八四年は〇回、八五〜八六年は二回で、きわめて例外的であった。冷戦後、米国の軍事費削減の中で、原潜の見直し論議が起きたのは当然であった。一部には原潜不要論まであった。

一九五四年に最初の原潜が就役して以来、米原潜の主要任務は旧ソ連に向けられていた。特にソ連戦略原潜が米本土を核攻撃する体制が作られてからはソ連戦略原潜の監視と攻撃体制を維持することが、米原潜の至上任務であった。

●シフトした原潜の任務

では、将来の原潜の任務は何なのか。

この見直し議論の中で、米国の新しい世界戦略にそって原潜の任務を整理し、潜水作戦担当の海軍作戦次長に報告した文書が出され、海軍作戦次長自身も論文を書いた。また、原潜の新しい行動パターンを報ずる米国ジャーナリストの取材記事も登場した。

それらを総合すると、いま、米原潜は冷戦後の地域戦争対応型の新任務を取り入れた行動パターンにシフトしつつある。

まず、米原潜の今後の任務を整理すると次のようになる。
①ソ連原潜の監視と攻撃体制の維持

従来より比重は小さい。

②ソ連の戦略原潜の核軍縮の検証。

③前進配備の原潜の諜報任務。特に第三世界の近海からリアルタイムの情報収集が可能。

④地域紛争の対応に必要な紛争国沿海における制海権の確保。第三世界の軍艦、潜水艦に対する。

⑤巡航ミサイル・トマホークによる陸上目標の攻撃。

⑥隠密部隊の輸送。最近の演習によれば数隻の原潜の共同作戦で七五人の特殊部隊の上陸をさせることができた。

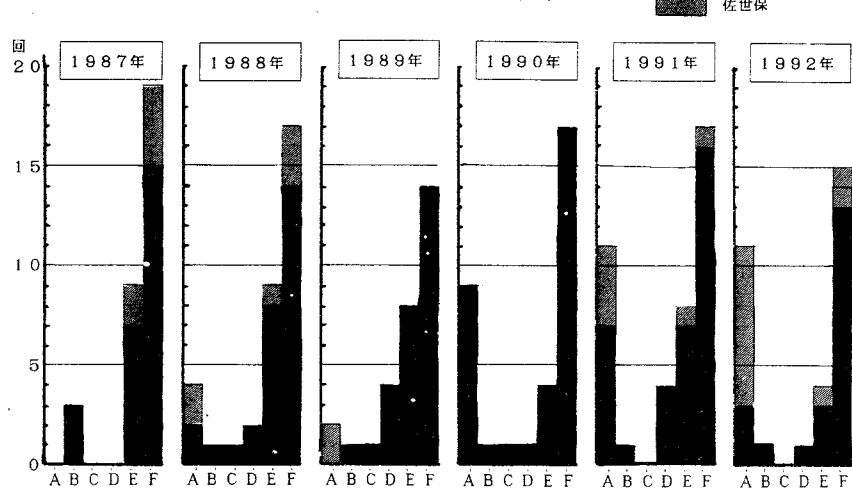
これらの任務の中、③④⑥は新しく強調されている任務である。いずれも潜水艦がこれまでのように単独の隠密行動ですますことはできず、潜水艦が水上部隊との共同作戦に組み込まれることを意味する。従って以前よりも頻りに水上部隊との情報交換を必要とするであろう。地中海では攻撃型原潜と複数の水上艦が「海洋打撃団(MAG)」を編成する試みが始まっている。

このことは、浮上しないことを原則としてきた原潜の行動パターンを

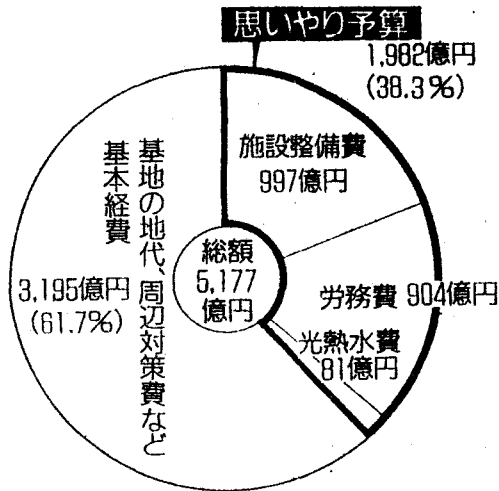
根本的に変えつつある、と文献は伝えている。

横須賀・佐世保で短時間寄港が増えたのは、このような行動パターンの変化と関係があると想像されるが、それ以上詳しい分析はまだ難しい現状である。

寄港原子力潜水艦の滞在時間分布



A: 1時間以下
B: 1時間を超え5時間以下
C: 5時間を超え1日以下
D: 1日を超え2日以下
E: 2日を超え5日以下
F: 5日を超える



住宅拝見

横田基地でもインデペンデンス艦載機の夜間訓練が開始され、今夜もわが家の上空は相当うるさい。NHKのクリントン就任の特別番組の画面は乱れに乱れている。基地の中の住人、軍人や軍属もうるさいのだから。

今回はその軍人や軍属の住んでい

る、米軍住宅の例から「思いやり予算」を具体的にみてみよう。

横田基地の住人、つまり軍人を訪ねる。九階建ての巨大な、高層住宅周辺のマンホールからはいつも白い湯気が見える。下水排水がお湯の証拠だ。駐車場も実に広い。わが家のとなりのマンションのように部屋の番号が書いてあって、狭いセコイ駐車場なんかじゃない。来客も好きに止められる。トントんと階段を上がって、両開きのガラス戸が三つ四つ並んでいる巨大な玄関を入ると、エントランスルームから暖房がしてある。ああ、暖かい！エレベーターは大小二個ならんでいる。デパートとの業務用か、病院の患者用みたいに大きくて奥行き深いエレベーター。目的の階のワンフロアには、なんとたった八戸しかない。全館では六十四個（一階は共用部分）。フロア中心にある、エレベーターを囲む通路も、鬼ごっこができるほ

標準床面積

ど、ゆったり広々していて、しかも暖かい。全館冷暖房完備だ。

部屋に入って、またまたびっくりする。なんといっても天井が高い。二十四畳のいわゆるリビングルーム、キッチンと合わせると、わが家がすっぽり入りそう。一戸の広さは図1にもあるように、一二〇㎡（約四〇坪）もある。私たちには敷地三〇坪の一戸建てだって高値の花なのに、寝室には専用のトイレとシャワーもついていて、クロゼットもすばらしく大きい。しかもこれが将校専用ではなく、下士官も住むという。このタイプの米軍住宅は日本中ほぼ同じ規格で、三沢や沖繩そして、緑を破壊し、反対を押し切って強行しようとしている、逗子の米軍住宅も同様だ。この建設費が一棟二十三億円。

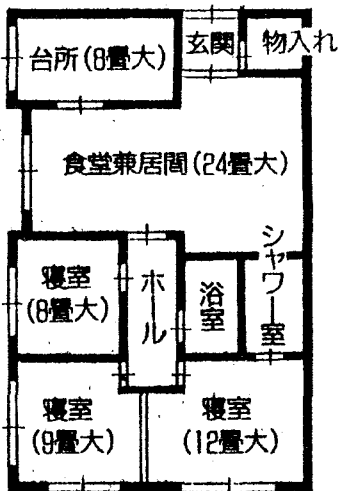
思いやり予算って

その2

何だぞう？

高層マンションから

軍艦棧橋まで



米軍家族住宅の間取り (120㎡)

そして今年度からは、この光熱費まで「思いやり予算」でみるのだ。電熱ヒーターでの炊事はさぞかし高い電気代だろう。

戦闘施設

このほかに、「思いやり」は軍人の保養施設や学校、教会、プールに体育館あげくの果てには麻薬患者の矯正施設までに及んでいる。これらのいってみれば非軍事、直接戦闘とは関係なさそうところだ。わが家のすぐ近所のフェンスの中の庭の広いテラスタイプの二階建てのきれいな家。芝生もきれいで、フェンスの外は建て売り住宅とは大違いだ、なんて腹を立ててみるが、しかし、この「思いやり」、軍人の周辺の設備だけではないのが恐ろしいところなのだ。

梅林さんの労著「在日米軍」を見

ると、在日アメリカ軍基地のマスタープランは、こうした「思いやり」での基地施設の建設整備施設を含んで作られていることが浮き彫りにされている。その中には、一基五億円で四八基作られる、三沢のF16戦闘機のシェルターや、エンジンテスト場、四三億円もかけた横須賀の棧橋、しかも二つ、横田の作戦室、などとアメリカ軍の軍事行動そのものを支えるものまで「思いやり」が使われており、アメリカ政府も日本政府もその合意の上であることが分かる。例えば、アメリカ国防省の九〇年会計年度では、在日米軍関係の建設費はゼロなのだ。

秘密主義

むしろ、「思いやり」の問題点はこのにある。この実態は、ほとんどわたしたち日本の市民には伝えられ

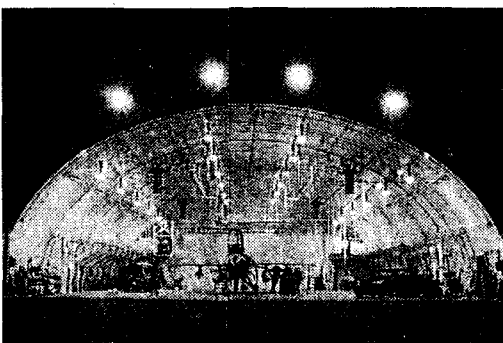
てはいない。では、アメリカではどうなのか。アメリカ政府はこの「思いやり」を「受入れ国の支援（ホストネーションサポート）」と呼んでいるという。

ところで、先月号でお話したが、福生市が横田基地へ行っている独自の「思いやり」下水道料金のおまけのことだが、この十五年間に約五億円にもなることまでは、やっと判明した。しかし、基地と福生市との下水道料金の徴収についての協定や、徴収方法を決めた事務文書については「防衛が、いろいろと」と言って、市は公表しようとしていない。市民の要求で三年後には情報公開条例ができる予定だが、しかし、たかが下水道料金のことだけでも自治体によってはこの調子なのだ。

今回は、二回続けて実態を見てきたこの「思いやり」に対して、いよいよ、どう考え、どのように対決するかを番だ。

三沢のF16用シェルター

図はすべて朝日新聞から



小牧—カンボジア ● 平和憲法を 積み残した定期便

河辺昭敏
あいち反戦の会

十月のPKO本隊カンボジア派遣のあと、あまり知られていないが、自衛隊のC130輸送機によるPKO定期連絡便が小牧基地からカンボジアに派遣されている。

第一便は、十月二十六日に小牧基地を出発。PKO部隊の補給物資・浄水装置の他、慰問品、家族からの手紙などを積み、那覇、マニラ、ウタパオ経由でカンボジア入りした。それ以降、ほぼ毎週月曜日毎に定期便が派遣されている。(一月一八日まで計二三便)

小牧基地の監視行動によると、使用されるC130は、機体番号071で、九〜十月のPKO部隊派遣に際しては、常に一番機で飛んでおり、輸送隊長機と推定される。

この定期便には、豊川、大久保など各駐屯地から前日の日曜日までに、資財や手紙などが集められ、C130に積みこまれる。各駐屯地では、隊友会・家族会を通してPKO部隊への慰問品・激励の手紙を集めており、昨年末の便は、正月用品とあわせて、そうした物品を満載したという。

そして、一月一八日出発した定期便は、陸自北部方面隊の幹部三人を同乗させた。三月末に予定されている第二次派兵の準備のため、現地の情報集めと資財の準備が目的。

また、この便は、マニラで、フィリピンPKO部隊の車両用タイヤを

積み込んだ。自衛隊機が、他国の軍隊への海外輸送支援を行なうのははじめてであり「集団的自衛権」に抵触するばかりか、もともと「PKO協力法」では、他国軍隊との行動を想定していない。今回の輸送は昨年十二月四日の「実施計画」改正にそったものである。(囲み参照)

渡辺外相の「PKO凍結解除」、「あらゆるPKOに積極参加」発言など、自衛隊派遣の既製事実は、従来もうけられていた制約を次々と破り、エスカレートしている。

私たち市民運動の側では、第二次派兵に反対する取組みが少しづつすすめられている。市民平和訴訟名古屋の会では、「PKO派遣違憲、派兵差止訴訟」を提訴しており(第一次提訴十月二二日)、北部方面隊の派遣に対しても、第二次提訴で、違憲、派兵差止を求めようと準備を進めている。

もひとつ 腹の重大決定も政府の

編集部

十二月四日の閣議はカンボジアPKO活動「実施計画」を変更し、自衛隊の担当業務に「輸送」「水・燃料の保管と補給」「浄水」を追加することを決めた。同時に、カンボジアPKOに関する政令の一部も変更された。UNTAACからの「物資・兵員の輸送協力を行ってほしい」という要請に応えるものである。

PKOの本体業務に携わっている他国部隊に対しても、その業務と「密接不可分、不可分一体となっているものではない限り、協力できる」との見解を示している(十二月四日「朝日」)。

PKO法のもつとも危険なところは、憲法にかかわることのような重大事項が、政府の一存で変えることができる「実施計画」に委ねられてしまっていることなのだ。

トマホーク艦長崎に入港 平和船団がデビュー航海

(詳しくは次号で)

一月十五日、長崎に横須賀を母港とするトマホーク搭載のイージス艦モービルベイが入港した。長崎への米軍艦の入港は八九年のフリゲート艦ロッドニー・M・デイビス以来三年ぶりである。この時、平和公園をおとす艦長らの献花を被爆者が踏み付け抗議した「花輪事件」を覚えていた人も多かったろう。

その時もそうだったように、今回の入港に軍事的な意味での必要性は何もない。「海洋戦術核撤去宣言」後の世論を瀬踏みするための「政治的入港」である。

市長と港の管理者である県知事は「確かに核は撤去されたかもしれない。しかし、被爆地の市民感情を逆撫でする軍艦は受け入れられない」と、ともに、入港中止を求めた。

「ピースバス長崎」など長崎の市民グループは、釣り船とゴムボートの平和船団(合計十隻)を出し、抗議。大きな注目を集めた。長崎では初登場の平和船団、デビュー航海記は次号で。



知る権利を足元で見つめながら書いた本が出版された。そこでは、国家機密という壁をよじ登って見渡した安全保障の世界を描く。これまでの防衛、安全保障に関する議論の多くは、すでにある答への道筋をいかに示すかであった、と思う。議論のかみ合った建設的な安全保障論争をと、論争の当事者は唱えてきた。過去三十年の間、同じ唱えを繰り返してきた。そんな議論を蹴飛ばして、自分の手で、足で、しかも「相手の目」を通して見える軍事基地の内部を、この本は明らかにしてくれる。「相手の目」が、情報公開の成果なのだ。

この本の主旨は、書名にもある「情報公開法」を利用した知る権利の行使にある。一市民が、合法的にアメリカ軍を相手に「四つに組んだ力相撲」を見せてくれる。情報公開法

書評

情報公開法 在日米軍

「相手の目」で見た

軍事基地の内部

我部政明

沖縄県宜野湾市在住

に基づいたやり取りは、読んでいて楽しい。「取りつくしまの冷たい冷淡」な回答であったとしても、そこが次の出発点。一步一步、事実を追い求める。いかに国家が情報を独占しているかに、怒りをおぼえるだけではなかつた。これまでの安全保障の議論の中で、多くの論者がどれほど情報つまり事実無頓着であったかを強く反省しなければならぬ。情報化社会という現在、情報公開がいかに大事なことか、いかに民主主義の根幹に関わっているかを知らねばならない。

兵力、航空機の数、軍艦の大きさが、軍事力を語るときの常套手段となっている。もちろん、それらは重要な要素であることに間違いはない。それだけでなく、本書は通信、暗号、謀報活動にかかわる部隊に迫る、さらに、

陸上に固定化している部隊だけでなく、洋上に展開する海軍力の意味を十二分に理解させてくれる。例えば、日本を母港とする第七艦隊乗り組み員を計算に入れると、在日米軍だけで太平洋における外国配備軍の半数になると指摘、米戦略が深く日本に関わりをもっていることを示している。

本書は、基地をマスタープランという計画書から描き出す。マスタープランとは、土地建物の利用についての中期計画だ。基地の施設建設、整備計画から、思いやり予算、という名の日本政府の具体的な関与を描く。金網の中では全く国民の知らぬ間に進められている。しかも、国民ひとりひとりの税金で、「情報公開法」で入手した資料をもとに、

(十二ページへ)

(二ページから)

すが……。あっ、見えました、見えました、あかつき丸です！間違いないですね。『しきしま』も見えます。巡視艇が沢山出ています。何十隻出ているのでしょうか。ヘリコプターもすごい数です。……十六、十七、……

あっ！ポートです！ゴムポートが三隻出てきました。海上デモです。あかつき丸の近くまでいけるのでしょうか。間に合うでしょうか。キャッチピースの湯浅さん、田巻さんも乗り込んでいます。ゴムポートが五隻になりました。グリーンピースの大きな船も見えます。みんなが拍手しています。海上にエールを送っています。

どうやらあかつき丸が接岸したようです。ただいまの時刻は七時八分です。地球を四分の三周してのプルトニウムのお帰りの三周です。

様々な課題を残した今回のプルトニウムの海上輸送でした。国民の一人一人がこの問題について真剣に考え、意思表示をしていく必要があるのではないかと思います。

以上で現場からのリポートを終わります。

この後私たちは十時半から二時間かけて、日本原子力発電東海発電所、日本原子力研究所、動力炉・核燃料開発事業団の周辺約五キロをデモ行進した。しかし東海村は昭和三十一年に日本原子力研究所が発足して以来、

「日本の原子力開発の発祥の地」として原子力と共に存在してきた村である。新聞の見出しに「熱い抗議行動よそに……地元は冷めた反応」と報道された通りの印象だった。「原子力との付き合いが長いから今回も特に不安視していない。」との村民の声や、「反対運動で村民の不安をかきたてないで欲しい」との村長の声もマスコミによって私達に伝えられた。……(86・3東海村は非核自治体宣言)

は情報非公開であった。日本はプルトニウムを何に使うつもりなのか？世界中の人々は日本のプルトニウム社会化への危惧を表明した。今日の日本は、核拡散軍事利用(核兵器保有)の可能性を否定することは出来ない。今回の輸送は事故もなく無事に終了した。とは言えこれから二十一年間に渡り英、仏からの大量輸送は繰り返される。そして秋には高速増殖炉「もんじゅ」が運転開始を予定。六ヶ所村では大規模再処理工場の建設も始まる。五日の入港時、取材に集まった外国報道陣は七十余名に及んだ。彼らは不思議がった。原爆の被害者である日本国民がなぜ、プルトニウム利用にもっと反対しないのか。

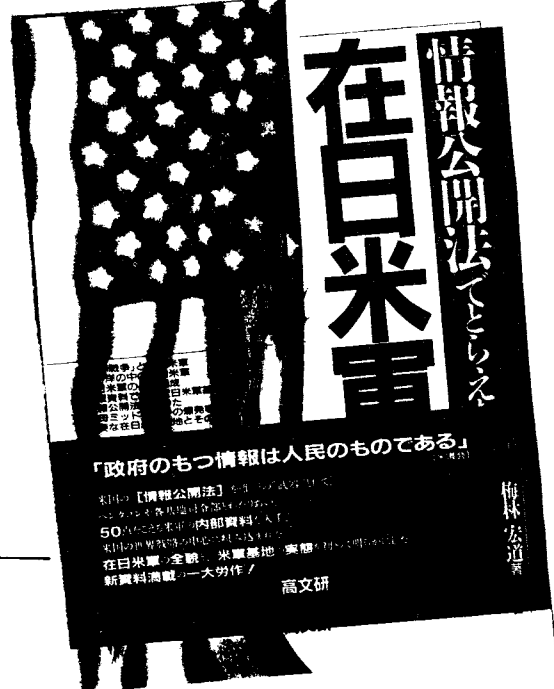
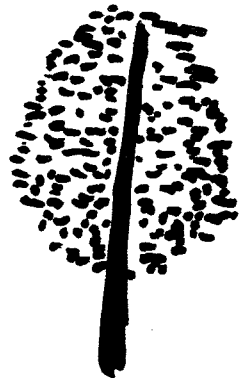
◆

あなたはどうか答えますか？

平和船団。大きなうねりと風で操船も思うにまかせなかった。



写真：今井 明



会計報告

(92. 12. 25~93. 1. 21)

[収入]

○前月からの繰越	163,404
○今月の収入	96,000
会費収入	66,000
内	0
維持個人	18,000
維持個人	0
参加個人	7,000
参加個人	41,000
通信会員	
カンパ収入	30,000

[支出]

●今月の支出	139,390
家賃(1月)	40,000
水道光熱費	6,923
電話・FAX費	7,869
郵送費	41,813
文具・備品	0
印刷・コピー代	30,580
行動費*	10,375
郵便振替等手数料	1,830
●次月への繰越	120,014

* 行動収入、経費は原則としてプログラム毎の独立採算となっているため、これにあてはまらない一部の収支のみが経常会計に計上されます。
 [注] 半専従者の人件費は有志の特別カンパと平和資料協同組合の準備活動の事業収入でまかっています。

編集室から

●正月早々、僕ら市民はステキなお年玉をもらった。プルトニウムを積んだタカラブネが帰ってきたー市民の手による平和のお年玉を祝える。そんな新春を、早く迎えたいものがあります。
 ●昨日で四〇になった。別にイミはないし、とくにカンガイもない。ないといったらない。どうだまいったか。
 (ま)
 (た)

(十ページから)

具体的にしかも正確度を一つ一つ高めながら、本書は書き進む。きつと、ミリタリーウオッチャーをうならせるだけの詳細さだ。それゆえ、一般の読者には混乱してしまう場面もあるだろう。
 訳語に戸惑いを覚えることもあるだろう。例えば、いわゆる「海軍作戦部長」を「海軍作戦総長」とするのは、これまでのわたしの慣れとChief of Naval Operationsのイメージからきこちなさを感じた。陸軍参謀総長(Chief of Staff, US Army)などと並列的なポジションだから「総長」とするのわからないでもない。また「飛行隊」あるいは「飛行中隊」と訳されてきたsquadronを「航空隊」

とするのも混乱の一つになっていないだろうか。

● ●
 ともあれ本書の意義は大きいと思う。国民ひとりひとりが、知りたいことを情報公開で求める運動を始めると、きつと面白い。◆

「情報公開法でとらえた 在日米軍」

虫喰いトマト
社あつかい

◆五冊以上ご注文の場合定価
 二五七〇円のところ一冊二〇〇〇円になります。(送料込)

月刊キャッチピース

(月刊トマ喰い虫改題)
 No. 6 (通巻85号)
 1993年1月20日発行

発行●脱軍備ネットワーク・キャッチピース

発行所●〒223 横浜市港北区箕輪町

3-3-1

☎045(563)5101

FAX045(563)9907

郵便振替●東京6-136148「キャッチピース」

編集●キャッチピース編集部

定価●100円(通信会員年間3000円)